



**戦隊ヒーロー
完全墮落計画**

イエロー編

目次

●狂愛の洗礼【催淫触手/放置/ボコ腹/潮噴き】3	
■不穩の影.....15	
●巨蛇に開かれた純潔【処女開通/ボコ腹/潮噴き】 ※途中まで.....43	

※サンプル版です。

●挿入あり

○挿入なし

■性描写なし

●狂愛の洗礼【催淫触手/放置/ポコ腹/潮噴き】

ゴチュ、ゴチュツ、ゴチュ、ゴチュツ、ゴチュ、ゴチュツ、ゴ
チュツ♡ズボッ、ズボッ、ズボッ、ズボッ♡ぐちゅり♡

「おゝっ……ご、お……ッ……っ！」

ズリ……ズリズリ……♡ぐちゃっ、ぐちゅっ♡ぐじゅっ♡
♡どちゅっ♡♡♡♡

「おゝぐっ♡おゝっ?!…っ、むぐうゝううううううっ♡
♡♡」

ビクビクッ♡ガクガクガクッ♡プシッ、プ
シャッ♡♡♡♡

暗湿な室内を照らしているのは、壁一面を埋め尽くす

いくつものモニターの青白い光だけだった。

床や机の上には、ギガ・ネビュラの研究者、ウトガルザが面白
半分に作り上げた機械と生き物を融合した生体器具や、得体の
知れないオイル瓶がいくつも転がっている。

その室内の一角に置かれた、特大のトランクケースほどの漆黒の箱。

その狭い密閉空間のなかで、星野陽は膝を抱え、まるで胎児のように小さく体を丸めた姿で閉じ込められていた。

内側の壁という壁には、気味の悪い粘液を纏った肉厚な触手がびっしりと敷き詰められている。

首領ロキから継承した能力と、ヨルムンガンド自身の細胞を分け与えて育てられた触手群、それらが狭小な空間で蠢き、陽の身体を押しつぶさんばかりの密度で絡みついていた。

ぬちっ……♡ぬちちっ……♡ずりゅっ……♡ずりゅっ……♡

「んうゝ うッ……♡むぐうッ……っ♡♡んう、ふうう……ッ、
ンうッ……♡♡」

狭く暗い箱の中で、触手たちが不気味な水音を立てて蠢くたび、陽のか細い悲鳴が漏れる。

しかし、その口内にはすでに極小の触手が潜り込み、舌を絡め取るようにして奥まで塞いでいた。

「んっ……♡……ふ♡うっ……、ううっ♡」

声を出すことすら許されず、鼻から抜ける甘く情けない喘ぎ声だけが箱の中に虚しく響く。

無数の触手先は、陽の開いた口腔から溢れる唾液、過敏になった下半身から滴り落ちる愛液、滲み出る分泌液に吸い付き、そしてぷっくりと膨らんだ淫芽を弄ぶようにちゅるちゅると音を立ててすすっていた。

体液を吸られる感触に、陽の身体は一層激しく跳ね上がる。

全身の孔という孔を塞がれ、長時間にわたって催淫液を注入され続け、激しく身体を震わせていた。

全身の皮膚が、異常なまでに過敏な性感帯へと書き換えられていく。

密着した触手たちが動くたび、膝を抱え込まされた姿勢のまま股間や胸、背中を甘く舐めずり回り、擦り上げられる。

逃げようにも指一本動かす隙間すら与えられない。

胸元には細い触手が何本も巻きつき、ぷっくりと極限まで腫れ上がった両の乳首を、逃がさぬようギリギリと締め上げていた。

さらには先端の小さな孔にまで細い触手の先がズゾゾと潜り込み、内側から直接、甘い分泌液を注入しながら蠢いている。

むき出しになった若く張りのある肌は、触手が蠢くたびにびくんびくと跳ね上がり、背を反らせるスペースもない箱の中で身を震わせた。

涙と涎、そして股間から溢れ出した大量の汁は触手にすすられたのかそれとも触手の粘液と混ざり合ったのかすら判断がつかない。

「むぐううううッ♡♡お`♡んッ♡オ`ン`っ♡♡」

ビクッ♡ビククッ♡ガクガクガクガクッッ♡♡

意識が途切れそうになるたび、最奥を抉り叩くような触手の蠢きによって覚醒させられ、狂おしい絶頂の波へと再度放り込まれる。

思考を放棄し、陽は果てのない拷問に苛まれ続けていたのだった。

ゴトンッ、と重厚な蓋が開け放たれる。

箱の中に眩しい光が差し込むと同時に、溜まっていた濃密な粘液の匂いとなまめかしい水音が室内へと溢れ出した。

見上げるほどに縦へと長く伸長した、異常な高身長、

幹部、ヨルムンガンド

骨ばった巨躯と妖怪じみた陰気な威容で箱を見下ろす彼の双眸には、ただの捕虜に対するものとは思えない、得体の知れない歪んだ執着が宿っていた。

「やあ、陽、……反省したかい？」

「ひっ……！や、あゝ あ……っ！」

全裸で勃起した巨根を陽へ向けながら、ヨルムンガンドは、蠢く触手を払いのけると、グチャグチャに開発し尽くされた陽の体を軽々と抱き起こした。

それだけですっかり過敏になった陽の身体に激痛のような快樂が奔る。

「あっ……、おッ、は、ひいいいっ……あ♡

あゝ ああお、おッ……♡」

しかし、度重なる絶頂で脳が処理しきれないほどの快樂に呑み込まれた彼は、もはや抵抗する気力すら残っていなかった。

焦点の定まらない虚ろな瞳で涙を流し、口元からだだらと涎を垂らしながら、抱き上げられるがままガクガクと小さな痙攣を繰り返すばかりだった。

「……ねえ、どこ見てるの？僕を見てよ、陽」

その瞳には光がなく、焦点すら合っていない。

放心し切った陽の態度に、冷ややかな声とともに、ヨルムンガンドの巨大な指先が、陽の真っ赤に腫れ上がった右の乳首を捉えた。

そしてぎゅうううっと、ちぎらんばかりの力で強く引っ張り上げる。

「ひぎゃあああああッ！？？！♡♡」

弾けたような衝撃に陽はつんざくような悲鳴を上げながら、股間から大量の潮をプシャリッと噴き出した。

身体が跳ね、あまりの快楽の暴力に呼吸すら満足にできなくなる。

たった一掴みの刺激で、全身が痺れて絶頂の波に呑み込まれていく。

「乳首引っ張られただけでこんなにお潮噴いちゃうなんて、えっちな身体になっちゃったねえ」

「はっ……あっ……♡ひゅ……っ、は、あ……っ……！お、もういやあ……っ！ゆうしてっ…♡…やめえ……ッ！」

涙でぐちゃぐちゃの顔で、ヨルムガンダの腕の中で一心不乱に身じろぎしながら許しを乞う陽、その間も肌と肌が触れ合う度に敏感になった身体は刺激され続ける。

ヒーローとしての強がりもプライドもどこへやら、ただの衰れた陽の頭を、ヨルムガンダは愛おしそうに撫でまわす。

「許して、じゃないでしょ？……『お兄ちゃん、ごめんなさい』は？」

「っ……！う、ううっ……ッ！」

「ほら、お兄ちゃんって呼びなさい。言えたら、もっと気持ちよくしてあげるからさ」

「ご、ごベッ……ごめ、ごめ、ンらしゃいゝっ……！ごべ、りや、しゃいいい……ッ♡」

「違うよ、『お兄ちゃん』でしょ？ふふふ、此処も直ぐ突っ込めそうだね♡」

「ヤッ、いやあああゝ あゝ ツ…ツや、やえへえっ、もういやあああつつ」

嫌がる陽は涙で視界を濡らしながら、首を左右に激しく振り乱した。

繋がれた手首をどうにか動かそうと体を振らせ、すがりつくように差しかけられたヨルムンガンドの胸元へ必死に爪を立てる。だが、過敏になった身体では力など入るはずもなく、ただ擦れるような抵抗しかできない。

「はいはいっ、駄々っ子な陽も可愛いねえ。仕方ないよね。これも教育だからね」

ヨルムンガンドは甘く言い聞かせながら、陽のヒクヒクと開閉を繰り返す蜜孔をくぱりと広げると、自身の凶悪な怒張を一気に根元まで突き立てた。

ドスツツツツ♡♡ごちゅんツツツツツツツ♡

「んぎゃあああああッ！！？♡」

貫かれた瞬間、陽の背中が弓なりにしなり、指先がピーンと硬直した。体中の筋肉が逃げ場を失ってビクビクと激しく痙攣する。

足をバタつかせて拒もうとするものの、腰を太い手でガッシリと固定され、根本から逃げることも叶わない。

「ほらっ、お兄ちゃんだよ。ほら、お兄ちゃんって言いながら腰を振りなさい♡」

ぐじゅっ……♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅちゅっ♡どちゅんっ♡どちゅん♡どちゅんっ♡♡

「いや……やめへえ、イヤぁぁぁぁ♡とまって……あゝ う♡うあ、あゝ ～～っ♡」

「聞き分けの悪い子だね？陽はいい子だから、お兄ちゃんの言ってること分かるよね？」

ゴッ！ゴッ！ゴッ♡どずっ♡ドスツツツ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっどずううッ♡♡

「あゝ、ぎっ♡あゝッ♡おゝ、おにい……っ♡おゝ おにい、ちゝや、あゝ あツツ♡♡あ、あゝっ♡あっ……！いぎゅっ♡いぎゅううううッ！！」

ぶしゃぁぁぁぁあッ♡ガクガクガクガクツツツ♡♡♡

嵌められた首輪を引き絞られ、上体を引き起こされた姿勢のまま、巨根に胎の最奥をドスドスと殴りつけられる。

先端が子宮口を穿ち、奥へ奥へと潜り込むたび、陽の小柄で滑らかな腹部が、内側からグニャリと不自然な形に盛り上がった。

埋め込まれた規格外の巨塊が蠢くたび、平坦な腹がぼこり、ぼこりと不気味に歪み、外からでもモノの輪郭がはっきりと浮かび上がる。

最奥の弱点を何度も強情に削り上げられ、脳みそまで蕩けるような快楽に耐えきれなくなった陽の体は大きく跳ね上がり、大量の液体を撒き散らしながら絶頂した。

しかし、ヨルムンガンドはピストンを止めるどころか、さらに速度を上げて凶器のような巨根を最奥へと叩き込み続ける。

ドスッ♡ドスッ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡ぐ
ちゅッ♡♡

「うぁぁぁ♡やぁぁッ♡まって えっ、まっへえ♡
……うぁぁ、あ〜っ♡♡♡」

絶頂の余韻で過敏になりすぎた肉壁を休みなく擦り上げられ、陽は半狂乱になりながら悲鳴を上げた。

「全くもう、お兄ちゃんを差し置いて一人だけ気持ちよくなっちゃって……陽は悪い子だね？」

甘く、けれど、ぞっとするほど陰湿な声が耳元で囁かれる。

「悪い子には、もっとたっぷりお兄ちゃんの愛情を注ぎ込んであげないとね……♡」

「ひゃあゝ、ひぎいいいッ！らめえッ♡あ、ひっ、……あゝっ♡あ、あんッ♡まだっ、いぐっっ、いぐうううっ♡♡♡」

休まることのない子宮への叩打に、喉を擦り切らせて泣き叫ぶ。

ねっとりとした湿り気のある陰湿な囁きと激しい肉突の音だけが、絶頂に狂う頭の中にいつまでも響き続けていた。

■不穩の影

星野陽にとって、小学生に上がる前までの世界は、甘くて温かい砂糖菓子のようなものだった。

「もう、陽は本当にいたずらっ子ねえ」

「ははは、陽は仕方のないやつだな。ほら、ピーマン残してないでこれなら食べられるか？」

両親はいつも陽を甘やかし、目尻を下げて「うちの天使」と呼んだ。

多少の好き嫌いをしても、お気に入りのおもちゃを放り出して部屋を散らかしても、

陽が人懐っこい笑顔を向ければ、世界中のすべてが許された。

社交的で、誰にでも愛される愛らしい子供。

それが自分という存在のすべてだった。

けれど、その温かい食卓の片隅には、いつもひっそりと冷たい『影』が伸びていた。

年の離れた、実の兄。

ひょろひょろと縦に長く、常に猫背で俯きがちな兄は、幼い陽にとって威圧感そのものだった。

何を考えているのか分からない、同じ家に住んでいるはずなのに、兄が発する空気だけが、まるで別の世界から混じり込んできたノイズのように気味が悪かった。

家族4人で囲む食卓でも、兄は絶対に会話に入ってこなかった。

両親が陽をちやほやし、陽が嬉しそうに今日あった出来事を話している間も、兄はただ黙々と、機械のように箸を動かしているだけだった。

声すら、ほとんど聞いた覚えがない。

陽は子供心にその存在が酷く怖くて、食事の席ではいつも、兄と視線が合わないように必死に両親の顔だけを見つめていた。

だから、ある日突然、兄が全寮制の学校に行くからと家を出て行ったとき、陽は心の底から安堵した。

冷たい影が消えた家は、さらに居心地が良くなった。

もうあの怖いっぽに怯える必要はない。自分だけの楽園が戻ってきたのだと、幼い陽は無邪気に喜んでいたので。

「……お兄ちゃんが、死んだ？」

ある日突然、家にもたらされた訃報。

当時の幼い陽には理解できるはずもなかった。

優しかった両親の変えてしまったことだけは分かった。

「陽。今日からお前は、お兄ちゃんの代わりに勉強をするのよ。お兄ちゃんが行っていた進学校のドリルよ、早くやりなさい」

「どうしてこんな簡単な問題も解けないんだ！兄さんはお前の年齢の時には、もう中学校の問題を解いていたんだぞ！」

昨日まで、笑ってピーマンを避けてくれた両親の顔が、見たこともないほど強張っていた。

天使だったはずの陽は、その日から『死んだ天才の身代わり』という名の、落ちこぼれの烙印を押された。

どれだけ机に向かっても、勉強が苦手な陽には兄の影に追いつけない。

期待に応えられず、怒られ、呆れられ、やがて無関心へと変わっていく。

昨日まで自分に向けられていた愛のすべてが、今はもうこの世にいない、あの陰気で怖かった兄の幻影へと注がれている。

「とうさん、かあさん……見てよ、俺を見てよ……」

いくら声をあげても、両親の瞳に陽の姿は映らない。

透明な存在になってしまったかのような底なしの恐怖の中、
陽の脳裏に、かつての記憶がかすかに蘇った。

(そうだ。まだ兄さんが家にいた頃、俺が転んで膝を派手にすりむいた時……とうさんとかあさんも、もの凄く慌てて、泣きそうな顔で俺を抱きしめてくれた。

あの時は、世界で一番俺のことを心配して、愛してくれていたんだ)

あの温もりを、もう一度だけでいいから取り戻したい。

学校の敷地内、裏庭の片隅で陽は高い塀の上へと登り、かつて怪我をしたら心配してくれたことを思い出して、ためらいなく飛び降りた。

バキリ、と鈍い音がして、足に経験したことのない激痛が走る。

「う、あ……あ、ぁアッ……！」

激痛と恐怖に涙をボロボロとこぼしながら、陽は地面にうずくまった。

保健室に担ぎ込まれ、すぐに両親へ連絡がいった。

先生たちが心配そうに見守る中、学校へ駆けつけてきた母親は、人当たりのいい母親の顔をして頭を下げた。

「すみません先生、うちの子がご迷惑をおかけして……」

先生の前で陽を叱ることは一切なかった。

けれど、学校を出て、2人きりになった車の中に足を踏み入れた瞬間、電子音を立ててドアロックが閉まる。

その無機質な音と同時に、運転席に座る母親が陽を怒鳴りつけた。

「あんた、自分で飛び降りたんだって？一体なんのつもりよ！」

鼓膜を突き刺すような怒鳴り声が、狭い車内に響き渡る。優しくかった「かあさん」の面影はどこにもない。

ヒステリックに吊り上がった目が、陽を激しく射抜いていた。

「嫌がらせのつもり！？お兄ちゃんの代わりにあそこの進学校に入るための大事な時期なのよ！塾の予定だって詰まってるの！いい加減落ち着いてよ！」

「……ご、めんな……さい……っ」

喉の奥がヒィヒィと引きつり、ボロボロと涙が溢れ出す。

見てもらいたかった。心配して、抱きしめてほしかった。

ただそれだけだったのに、母親の目に映っているのは、陽の傷ついた身体ではなく、邪魔者への苛立ちだけだった。

「……っ、う、あ……」

後部座席で小さく丸まる陽の足が、ズキンズキンと脈打つように激しく痛む。

応急処置をされただけの足の痛みよりも、車内の冷え切った沈黙と、バックミラー越しに向けられる母親の拒絶の視線の方が、幼い陽の心を何重にも深く切り裂いていった。



「かんばーい！」

プラスチックのコップがチープな音を立てて合わさる。

テーブルの端には、山盛りのフライドポテトと唐揚げの乗った皿。

部屋を仕切る重い防音扉の向こうからは、隣の部屋から漏れてくる重低音がかすかに床を揺らしている。

陽はコーラをぐいっと飲み干すと、タッチパネルを脇に放り出した。

「やっぱり密談つつたらカラオケボックスだよな！ここならどんな大声で喋っても外には聞こえねえし」

「ちょっと陽、何頼んでんだよ。真面目な話しようって集まったのにさ……」

春馬が呆れたように、おしぼりで指先を拭う。

その傍らで、メロンソーダのグラスを両手で大事そうに持っていた碧が、おずおずと口を開いた。

「あの、陽くん……。こんな油っぽいものを食べたら、栄養のバランスが崩れますし、消化にも悪いです。それに夕ご飯が食べられなくなってしまうですよ？」

「碧……。お前からたまに母性を感じるんだよな。とにかくだ！腹が減っては戦はできぬ！ほら食べよ、美味いぞこれ」

陽は揚げたてのポテトを一本つまむと、碧の口元にぐいと突きつけた。

碧は一瞬、おびえるように身を引いたが、陽の屈託のない笑顔に押されるようにして、恐る恐るそれを口に含む。

碧の大きな目がきらきらと輝いた。

「……！美味しい……です、これ！外側がカリカリしていて、
中がほくほくで……少し、しょっぱくて」

「だろ！？ほら、もっと食べ！皿ごとやるよ！」

春馬が小さくため息をつきながら、デンモクを操作する。

「あーあ、餌付けされちゃって……。っていうか碧、せっかく
カラオケ来たんだからなんか歌いなよ。履歴から適当に選んで
いいから」

「えっ、あ、ごめんなさい、……僕、歌とか、全然知らなくて、
スマホも親のペアレンタルコントロールで制限されていて……。

母がプレイリストに入れた TED のプレゼン動画と、あ、アニメ
は……にゃんこ日本史だけは視聴を許されていたんですけど
……」

「ぺ、ペアレ……？なんて？ペヤングの新しい味か？」

「ちがうよ、親が子供のスマホの機能とか見る動画をガチガチに制限するシステム。っていうか、TED ににゃんこ日本史って……教育番組だったよね？息が詰まりそうなんだけど」

「どういう家庭環境だよ……。こう……もっと楽しいやつとかあるじゃん、なんかちいさくてかわいいやつとか見ないわけ？」

「ちい……。？にゃんこ日本史は、猫が可愛くてとても面白いですよ……。？」

「いや、面白いけどさあ、普通の高校生はもっとこう、流行りのバンドとかアニメを観るわけ。……天然記念物か」

陽は引き気味に眩いたが、すぐに碧の皿に唐揚げをポンと乗せた。

「歌はいいから、今はポテト食おうぜ！」

「はい、ありがとうございます……。！」

嬉しそうにポテトを頬張る碧。その純粋な姿とは対照的に、彼らの足元にあるローテーブルの上には、電源を切られ、バッテリーまで抜かれた3台のスマートフォンが、重なり合っていた。

ここには、組織の目も耳もない。

陽はコーラのコップを置くと、不敵な笑みを消し、真剣な眼差しで二人を見つめた。

「……で、本題だけどさ。悠緋と蒼士の件、どう思う？」

その言葉に、部屋の空気が一気に張り詰める。

「いや、どう考えても怪しいだろ」

陽が低い声で吐き捨て、春馬が膝の上で拳を握りしめる。

「新メンバーが来るとか、意味がわからない。2人が特別任務だなんて、管理官に聞いても『お前たちは余計なことを考えるな、騒ぐな』の一点張りだし」

「セイバーズで死亡者が出たことはないって、入隊のときに上の奴ら言ってたよな？」

陽がすするように碧を見る。碧は口元を拭い、静かに眼鏡の位置を直した。

「……『死亡者』は、確かに存在しないと言っていました。配られた資料にも明記されていましたね。ですが……『行方不明者』については、彼らは一度も言及していません。つまり……」

「……そういうことかよ。マジか……」

陽が頭を抱える。彼らは5人で戦隊ヒーロー【セイバーズ】だ。過酷な運命を背負わされ、親にすら道具のように差し出された少年たちが、知り合ってから日は浅いが、唯一、背中を預け合える本物の仲間だった。

「どうしても、悠緋と蒼士が、任務を放棄して2人で逃げ出したとは考えられません」

碧の声が、悲痛に震える。

「俺もそう思う、あのクソ真面目な悠緋が、俺たちを置いて逃げるわけねえ、蒼士だって…」

「特衛さ、絶対、何か隠してるよ。俺たちも……もしかしたら……いや、なんでもない」

春馬がそこまで言いかけて、言葉を飲み込んだ。

『俺たちも、悠緋や蒼土のように行方不明になるのではない
か』

そんな恐ろしい仮定が頭をよぎったが、それを口にする勇気は、
なかった。居場所を失うことの恐怖を、春馬は誰よりも知って
いる。

重苦しい沈黙を破ったのは、碧だった。

「……知らないより、知っていた方がいいと思うんです。だから……僕、特衛のデータベースを探してみます」

「碧、そんなこと出来るのか！？ すごいな！」

陽が身を乗り出す。碧は少し視線を泳がせながら、小さく頷いた。

「実家のパソコンは制限されていましたが……学校の機材と、
特衛から支給された端末のポートをバイパスすれば、あるいは。
僕たちの機密保持契約の隙間を縫って、中枢データにアクセス
できるかもしれません。やってみるだけです」

「いや、マジで助かる！頼むわ、碧！」

「あまり期待しないでくださいね。……あの、陽くん。ポテト、もう一ついただいてもいいですか？」

「おう！全部食べ！お前のために追加で頼んでやるよ！」

陽の言葉に、碧はほんの少しだけ、安心したように目を細めた。



カラオケボックスでの密談から数日後、

深夜、防衛組織が管理する防衛隊員用の個室寮、その一室で、
3人は碧のデスクに置かれた私物ノートPCの液晶画面を凝視
していた。

部屋の明かりは落とされ、画面から放たれる青白い光だけが、
彼等の緊張した顔を照らしている。

碧のキーボードを叩く指が、神がかった速度で動き、いくつか
のセキュリティウォールをすり抜けていく。

親からの徹底的なデジタル管理を逆手に取り、抜け道を模索し続けた彼ならではの、執念とも言えるハッキング技術だった。

「……アクセス、成功しました。特衛の『アセット個別管理ステータス』です。ここから、暗号化された内部ログをデコードします……」

碧が最後のリターンキーを強く叩いた。

画面のノイズが一瞬だけ走り、緑色の英数字の羅列が日本語に変換される。

そこに表示された情報を見た瞬間、3人の息が止まった。

【登録番号：A-H-01/大和悠緋】

ステータス：KIA（戦死）

処置：除籍済

【登録番号：A-H-02/巽蒼士】

ステータス：KIA（戦死）

処置：除籍済

「待ってください！……これ……っ」

碧が悲鳴に近い声を漏らし、春馬の肩を掴んだ。

その指先は目に見えて激しく震えている。

「死んだ……？悠緋と蒼士が、戦死って……そんなわけない。遺体だって上がってないし、俺らには行方不明って言ってたのに！なんで……なんでこんなに簡単に、もう死んだことになってるの！？」

「……酷い、です。搜索のログすら、数日前に打ち切られています。まるで……最初から、いなかったものとして扱われているみたいで」

2人が消えた後も、組織の大使たちは平然としていた。『2人は長期任務だ』と世間を騙し、代わりのスピアを探しながら、自分たちには『気にするな』とだけ言い放った。その理由が、この画面に示されていた。

「……あいつら、俺たちをなんだと思ってんだよ」

陽が、これまでにないほど低く、怒りに震える声で呟く。

その時、液晶画面の最下部、戦死報告書の添付データに、奇妙なノイズ混じりの座標コードが点滅した。

[ALERT]最終微弱信号検出セクター：35.XXXX,139.XXXX

[STATUS]未確認地下セクター（アクセス制限領域）

「ここって……」

春馬が息を呑む。

「……2人が消えた、最後の場所です。本来なら特衛のレーダーには映らないはずの、地下の、さらに奥深くの座標……」

「……行こう」

陽が、迷うことなく真っ先に意思を示した。

いつものお調子者な雰囲気は微塵もなく、その眼光には鋭い決意が宿っている。

「ちょっと、待ってって！」

春馬が慌てて陽の肩を掴んで引き留めた。

「罨かもしれないだろ。普通に考えて怪しすぎる。碧、お前もそう思うだろ！？」

「……そ、それは……確かに罨の可能性は極めて高いです。でも……特衛も、もう信用できません。僕たちは、このまま何も知らずにあの寮に住んでいていいんでしょうか……？次は、僕たちの番かもしれないのに」

碧は自嘲気味に、ぎゅっと自分の拳を握りしめた。

受験関係で母親に縛られ、逃げるためにこの戦隊に入った。

だが、ここもまた、自分を縛り監視しているのだ。それにいつ殺されるか分からない。

「……それは……そうだけど」

春馬が言葉を詰まらせる。家に居場所がない自分にとって、特衛は唯一の避難所だった。だが、そこが底なしの蟻地獄だったという現実、全身の血が引いていく。

「俺一人で行くからいいよ」

陽は2人の葛藤を察したように、あえて軽く笑って見せた。

「ちょっと様子見に行って、危なそうだったらすぐに戻ってくる。大丈夫だって」

「それはダメです！」

碧が強い口調で、陽の言葉を遮った。

「二人は……悠緋も蒼士も、一人きりの時にいなくなったんですよ。もしそこが敵の根城なら、一人で行くのは自殺行為です。僕も行きます。陽くんを、一人で行かせられません」

「碧……」

陽が目を見張る。不器用で、いつも親の顔色を伺って怯えていたはずの碧が、自分を守るために真っ直ぐな目で立ちはだかっていた。

春馬は、そんな2人の姿を見て、大きくため息をついた。自分の髪をくしゃくしゃとかき回す。

「……はあ……。仕方ないか……。最近、不可解なことばかりで、いい加減、気味が悪かったんだ。置いていかれるのも癪だし、俺も行くよ」

深く溜息を吐いて、春馬は陽と碧の肩を叩いた。

「3人いれば、何とかなるんじゃない？ さっさと2人を連れ戻して、この最悪な組織とおさらばしてやろうよ」

「……春馬、お前……」

「そうと決まれば、準備しましょう。支給されたスーツとデバイスのGPS機能は、僕がこのPCからダミーデータを送ってごまかして……僕たちの位置情報は、今も寮の自室にあるように偽装します」

碧がテキパキとキーボードを叩き、偽装プログラムを展開していく。その横顔には、もう迷いはなかった。

「よし。じゃあ、サクッと2人を助けて帰ってくるぞ！」

陽が拳を突き出す。それに、碧と春馬が躊躇いがちに、けれどしっかりと自分の拳を重ねた。

彼らは静まり返った深夜の寮から、夜闇に紛れて駆け出していった。



「はぁ、はぁ……っ、こっちだ！碧、春馬、遅れるなよ！」

陽は、手にした懐中電灯の細い光で暗闇を切り裂きながら、カビ臭い地下の階段を駆け下りていく。

アスファルトの地上とは一変し、地下は不気味なほど静まり返っていた。滴り落ちる水の音だけが、コンクリートの壁に反響して鼓膜を打つ。

「待って、陽くん……！少し、ペースが早すぎます……っ」

碧が息を切らし、眼鏡を直しながら必死に陽の背中を追う。

その腕には、特衛の監視を欺くためのハッキング端末が抱えられていた

「陽、少し落ち着きなよ。静かに進まないと、何が潜んでるか……」

春馬が周囲を警戒しながら、押し殺した声で陽を嗜める。

だが、3人の焦燥感は限界に達していた。

特衛のデータにあった『最終信号ロケーション』

2人が消えた座標は、まさにこの廃変電所のさらに奥深く、立ち入り禁止区域の先を指している。

「だってよ、ここに悠緋と蒼士がいるかもしれないんだろ！？一刻も早く見つけて、こんな薄汚い場所から連れ戻してやらねえと……！」

陽が焦るのも無理はなかった。

街を襲う怪人、仲間を「戦死」として処理した組織、彼等を信じられなくなった今、地上には、もう彼らの居場所などどこにもない。

ここを突き進むしか、生き残る道はないのだから

「……あれ？」

先頭を走っていた陽が、ピタリと足を止めた。

ライトの光が照らし出したのは、通路を塞ぐようにそびえ立つ、不自然に巨大なシャッターだった。

だが、それは鉄製ではない。まるで生物の皮膚のように、無機質なグレーの粘液で覆われ、不気味に脈打つようにうごめいている。

「うわ、なんだこれ……。めちゃくちゃ気持ち悪いんだけど。……なあ、碧、これって地下の設備か？」

陽が嫌悪感を露わにしながら、ライトの光を這わせる。

「い、いえ……違います。この廃駅の設計図に、こんな隔壁はありません。それにこれ……」

碧が怯えながら眼鏡の位置を直し、手元の端末の画面を凝視した。

「……これ、怪人と同じ生体反応です。鉄のシャッターや壁の構造を取り込んで、無理やり怪人の肉体の一部に変質させているんだと思います……！」

「怪人と同じ反応って……じゃあこれ、生きてんのかよ！？」

陽が息を呑み、思わず一歩身を引く。

「……退路を塞がれる前に、奥へ進むしか……なさそうだな……」

春馬が青ざめた顔で、背後の暗闇を振り返る。

彼らに通ってきた階段の奥から、ずるりと、湿った音が聞こえ始めていた。

排水溝から無色透明の粘液状の軟体生物が、音もなく静かに這い出し、彼らの退路を塞ぐように集まりつつある。

「チッ、追いつかれてたまるかってんだ！行くぞ！」

陽が先頭に立って、半開きになった不気味な隔壁の隙間へと滑り込んだ。

「陽、待って！」

春馬と碧が慌ててその後に続く。

その瞬間だった。

ドンッ！！

「うわっっ！？」

背後で、地響きのような重い音が炸裂した。

3人が隙間を通り抜けた直後、頭上のコンクリートごと、巨大な肉壁の隔壁が音もなく急速に膨張し、落下して通路を遮断したのだ。

「陽！碧！！」

「春馬くん！陽くん！？」

シャッターの向こうとこちら側で、お互いを呼ぶ声上がる。

だが、その声は肉厚な壁に吸い込まれ、酷くもって聞こえる。

「くそっ、この壁、なんだよ！びくともしねえ！」

陽が拳で肉壁を殴りつけるが、弾力のある細胞組織に衝撃を吸収されるだけだ。

「……ダメです、これ、ただの物質じゃありません！どんどん膨らんでいって……自己増殖を始めています！早くここから離れないと、僕たちまで押し潰されて……」

碧の悲鳴のような叫びの途中、

ゴゴゴゴゴ……と、地底全体が身震いするような不気味な駆動音が響いた。

彼らが立っている足元の床、コンクリートの床だと思っていたそれは、実は巨大な軟体怪人の粘液に覆われた体壁だった。

床が斜めに傾き、液状化したコンクリートのように滑り出す。

「うわあああああああ！？」

抗えない重力と滑り台のような傾斜に流され、3人の身体は別々の暗黒のダクトへと滑り落ちていく。

懐中電灯の光が激しく回転し、お互いを呼ぶ声がどんどん遠ざかっていく。

引き裂かれた光の一切届かない、迷宮の奥深くへ。

3人がそれぞれの『檻』へと収容されたことを検知し、地下の制御中枢では、ハッキングされたホログラムモニターが点滅を始める。

『特級検体：個別分断完了』



暗闇に一人取り残された陽が、痛む身体を引きずりながら、おそろおそろライトを掲げた。

「っ……、お前は……………！？」

懐中電灯の細い光の先、うす暗い霧の奥から、ぬうっと姿を現したのは、

異常に背が高く、陰気な雰囲気纏った男だった。

分断された暗闇の奥、カビ臭い空気の中に、そいつは佇んでいた。

異常なほど長い四肢を不自然に折り曲げ、酷く猫背になってこちらを見下ろしていた。

猫背であるにもかかわらず、ゆうに二メートルは超えているであろうその体軀は、人間の形を模した別のナニカだ。

男が、ボソボソと呪怨のように何かを呟く。

『……みつけた……………』

だらりと頬に垂れ下がる、脂ぎった長い黒髪。

その隙間の奥で、爛々と飢えた瞳が妖しく光った。

ヤバい、と陽の本能が最大級の警鐘を鳴らす。

男が細い指をピクリと動かした瞬間、地表が、コンクリートの床が一斉に牙を剥くように盛り上がり、陽の身体を打ち据えた。

衝撃を自覚する間すらなかった。

視界が上下に激しく反転し、強烈な圧迫感とともに肺の空気がすべて強制的に絞り出される。

「カハッ、あ、が……………っ！？」

抵抗する間もなく、陽の視界は暗黒へと叩き落とされた。

●巨蛇に開かれた純潔【処女開通/ポコ腹/潮噴き】※途中まで

朦朧とする暗闇の底で、じわじわと、しかし圧倒的な「細胞の鳴動」が、陽という人間のカタチをぐにゃりと歪ませていく。

熱い熱い熱い

ドクドクドクドクドクドクドクドク——！！

身体全体が酷く脈打っている。心臓が破裂しそうなほど早鐘を打ち、全身の血液が沸騰しているかのように熱いのに、指先一つ動かない。

首から下の感覚が遮断されたように、己の肉体が制御を失っていた。

体内のすべての細胞が強制的に破壊され、別のナニカへと組み替えられていく、強烈な炎症のような拒絶反応。

あまりの熱量に意識の芯は溶かされ、陽はすんなりと、再び深い闇の中へと沈んでいった。

ぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっ

ずっと身体が熱い。腹の中が、内臓を直接素手で掴まれてかき回されているように酷く痛む。いや、痛みだけではない。

下半身がずきずきと異様な熱を持っている。

自分の肉体ではない何かが、内側に無理やり割り込み、強引に蠢いている感覚。

ぐぶっぐぶっぐぶっぐぶっ…………

「……っ、ふ、あ…………ぐ、う……？」

次に陽が意識を浮上させたとき、最初に感じたのは、尋常ではない下半身の重苦しさだった。

肉体は身動き一つ取れないまま、背後にいる『何か』によって強固に縛り付けられている。

大きな生き物の気配。

状況を把握しようと、混乱しながらも自分の身体に意識を向けた、その瞬間だった。

内臓を直接割り裂かれるような、体験したことのない痛みと共にせり上がってくる強烈な感覚

悲鳴とともに陽の背中が跳ね上がる。

「ひ、あゝっ！？あ、が、あああああっつつっっ！？؟؟」

はっ、はっ、はっ、はっ、息が荒くなる。

（な、んだ、これ）

ズグズグッとリズムカルに腹の中を下から突き上げられ、内臓がせり上がるような凄まじい圧迫感に脳がパニックを起こす。

反射的に何が起きているのかを確かめようと、必死に首を巡らせて後ろを振り返ろうとした。だが、そうはさせてはくれない。

「……っ、が……あ！」

陽の腹部を、がっしりと長い、人間のような5本指の、異様に大きな両手が左右から驚掴みにし、

指先が脇腹の肉に食い込み、陽の身軽な身体をいとも容易く、まるで軽いぬいぐるみでも扱うかのように上へと引き上げる。

破れたヒーローズーツからは胸元や下腹部が露出しており、むき出しになた股の間には規格外な男の巨根がそびえ立っている。

陽はその瞬間、今現実には起こっていることを理解してしまった。

「っ、あ……え……？ひっ……！や、なにか、入っ……あゝ
あッ！？いやだあッ、あああああああ」

逃げようと身を振らせた陽を抑え込むように、その先を化け物は『孔』にぐずうっつ、と埋め込んだ。

後ろから覆い被さるように、肉の檻に閉じ込められ、
座った姿勢のまま、そいつは陽の腹を掴んだ手を上下させた。

ズボッズボッズボッズボッズボッズボッズボッズボッ！！

「やあああッ！ひい、んぎっ……、っ！」

人間のものとは思えないほど太く、長く、禍々しい異形が、陽の『孔』を使って根元まで埋め込み、己の巨根を狂ったように扱っていた。

化け物じみた図体の男のピストンに合わせて、陽の身体が上下に激しく揺さぶられる。

ガツガツと、と最奥を打ち抜くような猛撃のたび、小柄な腹の皮が一枚突き破られんばかりに薄く引き伸ばされ、

禍々しい肉塊の『頭』がぐにっ♡と内側から皮膚を押し押し上げて隆起した。

あまりの容積差に腹は膨れ上がり、猛烈な律動に連動して、モノの節々の形状をなぞるように腹部がゴツゴツと醜く歪み波打つ

肉と肉がぶつかり合う、水音が反響する。

抵抗など1ミリも通じない。身軽な陽は、ただの便利で気持ちのいい道具のように使われているのだと、本能が最悪の事実を突きつけてくる。

「……あ……起きた……？お前の、なか……はあっ、はあっ、ちいさくて、あったかい……」

背後にいる男の顔は見えない。ただ、だらりと肩に落ちてくる長く脂ぎった黒髪感触と、首筋を這うようなボソボソとした呪怨のような呟き、そして自分を物質として消費している底冷えするような陰気な気配だけが伝わってくる。

情赦なく叩き込まれる激動、陽は、無意識に視線を落とした。

後孔とは明らかに違う、下腹部のさらに奥深くへと直通している。

そこを凶悪な化け物のイチモツでズボズボと出し入れされているのだという狂おしい身体感覚が、陽にこれが不都合な現実なのだとは叩き込んでくる。

己の身体が女のそれへと変化し、深々と肉棒を受け入れる膣が形成されてしまっている事実を、嫌というほど自覚させられた。

【続きは製品版をお楽しみください】